



ナラティブホームの物語 終末期医療をささえる地域包括ケアのしかけ

編：佐藤伸彦
A5判・272ページ
定価：本体1,800円＋税
発行：医学書院(03-3817-5600)

ナラティブ——患者の人生の物語へアプローチするための 臨床的しかけの実践書

評者◎工藤由美 亀田医療大学看護学部講師

いわゆる団塊の世代が定年を迎え、日本社会の高齢化と多死化のピークはすぐそこまで来ている。しかし、それをささえる地域医療体制の整備は十分とは言いがたい。医療保険(健康保険)と介護保険の関係も、うまく連携させることがままならない現状がある。しかも、医療、なかでも終末期医療は、科学だけを頼りにすれば、なんとも冷たいものになりかねない。死に行く者の、人間としての尊厳を守ることさへ難しい。本書は、そのような状況を転換し、終末期地域医療の新しい形を模索してきた著者の思いと実践の記録である。

本書は二部構成になっている。第一部は、多くの物言わぬ／言えぬ患者とその家族、著者と共にそうした患者・家族と向き合ってきた看護・介護の同僚たち、著者の考え方のよき理解者である上司、はたまた反面教師の同僚医師などとのさまざまな出会いをきっかけに形成され、ナラティブホーム構想へと収斂していく著者の思いと、その時々展開された実践が綴られている。この部分は、2008年に『家庭のような病院を人生の最終章をあったかい空間で』(文藝春秋社刊)として出版されたものを再編集したものという。

第二部は、前段の三分の二ほどが、著者がナラティブホームについての勉強会を始めた2003年から、2010年のナラティブホーム設立までの出会いとその活動の記録であり、後段の三分の一ほどで、ナラティブホームで人生の最終章を過ごされた人々のエピソードが紹介されている。

著者の佐藤医師がめざすのは、「高齢者の人生の最終章をその人の物語として理解し援助」できるような地域医療の新しい形である。そこで重要になるキーワードが「ナラティブ」(＝語り、物語)であり、「しかけ」である。物言わぬ患者の人生の物語へアプローチするための臨床的しかけとして、アルバムづくり(ナラティブアルバム)や患者の名言集の記録(ナラティブシート)があり、高齢者地域医療を変えていくためのしかけが、ナラティブホームという「賃貸住宅」が提案する医療・介護・福祉の、相互補完を基本とした連携の仕方である。

脳血管障害の後遺症や認知症のために寝たきりで意思も伝えられない患者、しばしば単なる身体的存在としか感じられない患者と向き合うことの多い医療者にとっては、患者というナラティブにアプローチする二つの臨床的しかけは、今後の実践へのよい参考になるのではないだろうか。ただ、ナラティブシートの分析は簡潔な紹介だけなので、今後の著者らの活動報告に期待したい。一つ気になったことは、おそらく医療者にとっては当たり前のロジックなのかもしれないが、いわゆる一般人の感覚で本書を読んだとき、なぜこういう文章のつながりになるのだろうと、引っかかったところが少なからずあったことである。

とはいえ、これからの高齢者地域医療の展開にとって示唆に富んだ思考と実践の記録であることは確かである。